

〈研究ノート〉

「異文化理解」という捉え方についての検討

前田尚子

On The Concept of Intercultural Understanding

MAEDA Naoko

In recent years, Japanese have had more opportunity than before to come in daily contact with people of diverse cultural backgrounds, both in and outside of Japan. At the same time, Japanese have been criticized for an inability to build constructive relations, based on acceptance of cultural differences, with persons from other cultural backgrounds. For this reason, much research in intercultural communication emphasizes the need to develop communicative competence for intercultural understanding. The aim of this paper is to review and reconsider intercultural communication, with a focus on the positions from which researchers view the phenomenon of Japanese interpersonal communication. In concrete terms, I first examine what researchers mean by “communicative competence” and “intercultural understanding”. Upon examination, it appears that these researchers aim to foster the competence that would allow Japanese to interact effectively and positively with peoples from different cultures and respond appropriately according to context. Furthermore, they take the concept of “intercultural understanding” to mean the interlocutors’ sharing of “norms”, which determine the felicity of each act and see their own position as that of neutral, detached observers, aloof from the observed phenomena. The paper concludes that this mainstream perspective, which aims to promote mutual understanding among interlocutors, represents a particular (and therefore limited) viewpoint.

キーワード: 同質性と異質性、異文化理解、コミュニケーション能力、超越的な見地、対称性と非対称性

はじめに

対人コミュニケーションをする際の日本人の問題点として、以前から、「異質性」に対する認識の欠如ということが指摘されてきた。「異質性」に対する認識の欠如、つまり、文化的に「異質」な人びとと、その文化的差異をわきまえた上でのコミュニケーションができないということが批判されている。ことに近年では、コミュニケーション研究者の間に、「日本社会の内における国際化」(御堂岡 1991、4 頁)という認識や、「単一文化、単一民族などと呼ばれてきた日本にも、多くの種類の文化が共生し、共文化という枠組みを構成している」(宮原 2000、247 頁)といった認識が定着しつつあり、日本人の経験する「異文化コミュニケーション」の範囲は拡大して捉えられる傾向にある。そのため、上のような問題提起はいっそう重みをもつようになってきた。そして、この課題を克服するために目標とされてきたのが、「異文化理解」と「コミュニケーション能力の育成」ということである(石井 1990、41 頁)。

こうした昨今の状況を踏まえて、本稿では以下の二点について検討していきたい。第一に、「異文化理解」「コミュニケーション能力」は、これまで「異質」な人びととの対人コミュニケーションを成立させる条件として、日本人に広く求められてきたものである。では、この「異文化理解」と「コミュニケーション能力」とは、そもそもどのように振る舞えることを意味する概念なのだろうか。第二に、「異文化理解」と「コミュニケーション能力」が第一のような特定の意味において求められるとき、その背後には、研究者のコミュニケーションに対するどのような「認識のあり方」が関わっているのだろうか。

今日、「異文化理解」「コミュニケーション能力」は、日本人の抱える問題点を克服する鍵概念として頻繁に用いられている。だが、これらの概念は、なぜ解決策として有効と見なされてきたのだろうか。上の二点にわたる検討は、これまであまり吟味されることのなかったこうした疑問に答え

「異文化理解」という捉え方についての検討

るためのものである¹⁾。本稿に意義があるとすれば、それは、あまりに自明と見なされ顧みられることのなかった概念に対して、その捉え直しを試みている点にあるといえる。

1. 日本人の対人コミュニケーションの“現状”とは

従来、「異文化理解」ができ、「コミュニケーション能力」をもつということは、コミュニケーションにおいてどのように振る舞えることを意味してきたのだろうか。この点を明らかにするため、まずは、日本人の対人コミュニケーションに対するどのような“現状”認識のもとにこれらの概念が重視されるようになったのか、ということを見ていくことにする²⁾。

1-1. 相互補完的なかわり

「甘え」(土居 1971)、「タテ社会」(中根 1967、1972、1978)、「間人主義」(浜口 1982)、「阿闍世コンプレックス」(小此木 1982)、「遠慮と察し」(Ishii, 1984) など、これまでに、日本人の対人関係・対人コミュニケーションの“現状”を把握するためのさまざまな鍵概念が提起されてきた。これらの分析に共通して指摘されていることは、日本人の対人関係を「相互補完的なかわり」として規定していることである。

たとえば、中根(1967)は、日本人の対人関係を、「親分―子分」の関係にたとえて象徴的に捉えている。すなわち、日本人は、一方の「温情」に対しては他方の「忠誠」によって、また、一方の「保護」に対しては他方の「依存」によって情緒的に結びつくという。具体的に述べれば、「子分」の立場に立つ人は、「忠誠」を誓い「依存」するということでは「親分」に相当する人の意向に従っており、また、「親分」の立場に立つ人は、「温情」をかけ「保護」をするということでは「子分」の側の説や希望を聞き入れていることになる。両者は、お互いに相手の意向を受け入れ、譲歩している(相手の身になって配慮をしている)という点で、相互的である。しかも両者は、一方の求めに対して他方が受け入れや譲歩によって補っており、要求と受容をうまく組み合わせ、補完し合っているという。

これと同様の分析は、小此木(1982)においても見られる。

母の目つき、表情を注視する乳児は、その微妙な動きを通して自分の状態を知り、母もまた、言語以前の乳児の態度、表情から、「求めるもの」を読み取って適切に応答する。「母と子」に特徴的なこのお互いの非言語的な察し合いと読み取りの能力がとくに発達しているわれわれ日本人は、それだけに、まずはじめに相手の身になって考え、相手の気持に合わせてその言動を方向づける習慣の中で暮らしている。(49頁)

これらのことから、「相互補完的なかわり」とは、双方がお互いに相手の要求に対して、その「求めるもの」を「読み取って適切に応答」する(相互に相手の要求を補完する)という形のかかわりを言い表したものであることがわかる。

1-2. 「ウチ」と「ソト」との「主観的」な区別

日本人の対人コミュニケーションの“現状”として、もう一つ重要な特徴が指摘されている。それは、日本人がかかわりをもつすべての人に対して補完的である(求めるものを読み取って適切に応答する)わけではない、ということである。したがって、ここでは、日本人がどのような相手に対しては補完的にかかわり、どのような相手に対してはそうではないと分析されているのかということ振り返っていくことにする。

上述の小此木(1982)は、相手に対して補完的な人が、実は「暗黙のうちに、相手もまた同じような配慮を自分に与えてくれるだろうという期待」(51頁)を抱いていることを指摘している。日本人が補完的な姿勢をとる背後に、このような相手に対する暗黙の期待(相手も自分と同様に補完的であることについての期待)のあることを指摘する研究は多い。その一人として、岩田(1982)を挙げることができる。

岩田は、一人の日本人が一般的に経験しうる対人関係のバリエーションを、三つのカテゴリーに分けている(「無縁の関係」「なじみの関係」「気のおけない関係」)。その上で、これら三つのうちのどの関係において配慮に満ちた態度がとられ、またどの関係においてはとられないのかを分析して

いる。

まず、「無縁の関係」とは、名前も素性も知らない「縁なき人びと」(典型的には、駅や電車のなかで行き交う人びと、または外国人)との関係を指す。これに対して、「なじみの関係」とは、個人的な接触を通して、互いの名前や社会的地位、人柄を知るようになった間柄のことをいう。また、「気のおけない関係」とは、「なじみの関係」よりもいっそう親密さの増した間柄である。このうち、一般的に人が受容的・調和的・同調的(つまり補完的)な態度をとるのは、相手がその人にとって「なじみの関係」「気のおけない関係」にある場合であるという。一方、「縁なき人びと」に対しては、人はむしろ配慮に欠けた傍若無人な態度に出ることが多いという。こうした態度の違いを生む要因は、自分に対して何らかの配慮をしてくれるだろうという、その当人の相手に対する期待や信頼の有無に求められている。

同様に浜口(1982)は、相手に対する働きかけの拠点を自己自身ではなく相手の側におくという意味での補完性を日本人の特徴として見出し、それが「ウチなる対象にしか適用されない」(46頁)ことを指摘している。そして、誰がその「ウチなる人」の範囲に入るのかは、個々人の「主観的」な判断——その相手とならお互いの立場に立って配慮をし合うことができるだろうという判断——にかかっていると述べている。

一方、中根(1972)は、日本人が、相互補完的なかかわりを容認・期待する「ウチ」の人と、それを容認・期待しない「ソト」の人とを、「自己中心的な社会学的認識」に基づいて区別していることを明らかにしている。それによると、この社会学的認識のもとでは、人は、共有経験の程度や自分がどの程度親しくなりたいと思うかによって、かかわりをもつ人びとを「ウチからソトへ」と連続的に位置づけて捉えているのだという。「ソト」に配されるのは、接触が少なかったり、自分が関係をもたたくないと主観的に思う人びとであり、そうした相手とは排他的、または間接的・儀礼的なかかわりをもつことになる。一方、「ウチ」と見なされるのは、当人が本格的に関係を結びたいと思う人びとであり、これらの人びとは「われわれはみな同じなのだ」という期待を前提に、積極的に補完的

な関係を目指すのだという。

2. 日本人の“現状”に対する批判とは

以上の見解をまとめると、日本人の対人コミュニケーションのとり方は、相手を「ウチ」と見なすか、それとも「ソト」と見なすかということによって、大きく異なってくることになるという。まず、相手を「ソト」と見なす場合、その人の相手に対する姿勢は消極的・排他的になる。一方、積極的な対人姿勢をとるときには、その人は相手を、自分と同様の適切な応答のできる「ウチ」の者と見なしており、したがって、相手に対して補完的なかかわりを求めることになる。

こうした“現状”認識のため、日本人の対人コミュニケーションに対しては、以前から次のような批判がなされてきた。日本人は、自分と相手との「異質性」を考慮に入れた上で、積極的にコミュニケーションを築くことができないのではないか、というものである。遠山(1989)が日本人のコミュニケーションを「両立型」と規定し³⁾、次のように分析しているのもその一つといえる。

(日本人は、)安定と信頼関係に基づく、濃密な、仲間内だけのコミュニケーションを発達させ、異文化・異人との「異和性」を解消する方法としてのコミュニケーション型を発達させなかったのではないか。(113頁)

また、ハウエルと久米(1992)が、「(日本人は)異文化の人々とのコミュニケーションにおいても、自分の価値観や倫理観に基づいて対処しがちで、それがともすれば自民族中心主義的(ethnocentric)な傾向を反映してしまう」(194頁)と述べているのも代表的な例である。

「異質性」を踏まえたコミュニケーションができないことによる問題としては、具体的に二つのものが挙げられている。一つは、異文化の人びとを、いわゆる「ヨソ者」「縁なき人びと」として捉えるために引き起こされるという問題である。中根(1972)は、日本人が「ヨソ者」にあたる異文化の人びとに対して、「積極的に働きかけ、本格的な人間関係を結ぼう

「異文化理解」という捉え方についての検討

としない」(117 頁) ことを問題視している。また、宮原(2000)は、「自分達とは違った経験、知識、資格などを持つ人間が集団に入ろうとすると、まず何とかしてそれを阻止しようとする」(263 頁) 日本人の傾向を指摘している。一方、なぜこのような態度をとるのかということについては、手塚(1994)が次のように説明している。

日常的に、異文化の人々と接触する経験に乏しかったために、彼等との異文化コミュニケーションにおいては、まず相手の異質性が際立ち、一体感の成立は無理と感ずることが多く、「わかってもらいたいがダメそうだ」と早々に納得してしまい、部分的理解の積み重ねを目指す長いコミュニケーションのプロセスを、初めから放棄してしまうのではないか。(38 頁)

もう一つは、異文化の人びとに対して、「気のおけない関係」または「なじみの関係」のかかわりを強制してしまうという問題である。中根(1972)によると、日本人は異文化の人びとに対して積極的に(一生懸命に)ことをかまえようとするとき、概して、「人間はみな同じなんだ、誠意をもってすれば通ずる」(119 頁) といった思いとともに、「ウチ」の者に対する態度(暗黙のうちに適切な応答を期待する)をとってしまうという。だが、この姿勢は、そのアプローチが相手にとっては迷惑であることに当の日本人が気づいていない点で問題をもつという。また、小此木(1982)は、相手との一体感を前提、または期待する日本人の対人関係様式が、互いに気心の通じる「ウチ」の世界はともかく、その「ソト」の世界には通用しないということを強調している。

3. 「異文化理解」「コミュニケーション能力」とは

では、日本人のこうした“現状”を改善するために、どのような解決策が提示されているのだろうか。つまり、「異質」な相手との「異質性」を踏まえた積極的なコミュニケーションを成立させるために、日本人には何が必要だとされているのだろうか。この課題に対する対策として挙げられてきたのが、冒頭でも触れた「異文化理解」と「コミュニケーション能力

の育成」である。

さて、宮原(2000)は、「異文化の相手との人間関係」の理想的なあり方として、以下のように振る舞えることを提言している。すなわち、①「相手の文化を根本から理解し、同時に自分が本来もっている文化的背景に対しても深い敬意を持ち続け」(260頁)、②「その結果、ものごとを複数の文化的視点から観察、理解、解釈することができる」(同上)という姿勢である。この提言には、これからの日本人に求められるものとして二つの側面(①と②)が指摘されている。ここでは、とくに、これら二つの側面の吟味を通して、従来、「異文化理解」「コミュニケーション能力」という言葉によってどのように振る舞えることを意味してきたのかということを探っていくことにしよう。

3-1. 「コミュニケーション能力」とは

第一の側面(①の部分)で指摘されているのは、いわゆる「文化相対主義」の立場に立つということである。岡部(1987)は、このことを別の言葉で、「どの文化特性も『正しい』とか『誤っている』という次元ではなくて、自分が慣れ親しんでいるものとはただ単に『違っている』という次元で受容する」(120頁)ことだとしている。また、ホフステード(1995)は、「ある集団が他の集団に比べて、本質的に優れているとか劣っていると判断する科学的な根拠はまったくない」(6頁)として、「異質な文化について判断し行動を起こす前に、文化の違いの本質について知り、そのような違いを生み出した源と違いがもたらす結果について情報を得ることが必要である」(同上)と述べている。この姿勢は、グディカンスト(1993)の「マインドフル」という概念ともよく似ている。「マインドフル」とは、「異質」な相手の行動を「自文化の尺度で解釈してしま」(190頁)わないように、「新しい情報の受容と複数の考え方の容認」(58頁)のできる状態を指している。

もう一つの側面(②の部分)は、第一の側面を踏まえた後に焦点になるとされる事柄である。すなわち、コミュニケーション研究者が②の姿勢を重視する背景には、シタラム(1986)に代表されるような、「文化相対主

「異文化理解」という捉え方についての検討

義」を前提とした上での疑問——「情報源と到達地点が異なる文化に属するとき、意図された情報のうちどれだけを到達地点は受けとめるのか」(36頁)、「二つの文化の成員同士が話すとき、彼らはそれぞれ相手の心に、意図した意味を作り出せるのだろうか」(38頁)——が関連している。

そのため、②において求められているのは、ハウエルと久米(1992)の言葉を借りれば、「コミュニケーションのギャップを減少し、相手に受け取られた意味が自分の意図した意味に近くなるようにする」(63頁)という姿勢である。グディカンスト(1993)も、同様に、当事者間で誤解を最小限に留めること、つまり、「授受したメッセージに当事者双方が、比較的類似した意味を付与すること(つまり、双方がメッセージを同様に解釈すること)」(47頁)が大切であると述べている。そして、二者の間の誤解をできるだけ排除したコミュニケーションを「効果的コミュニケーション」と表現している。

では、双方においてメッセージを同様に解釈するということ、それは具体的にはどのように振る舞うことを意味しているのだろうか。グディカンスト(1993)は、このことを、コミュニケーションが目的や場面(コンテクスト)に「ふさわしい」ということ、つまり「適切さ」や「妥当性」をもつことと言いかけている(そして、それがひいては、誤解を最小限に留め、自分の目的の達成にもつながるといふ)。この考え方に沿って、宮原(2000)は、人が「送り手」と「受け手」の立場に立った場合に、それぞれどのような振る舞いが求められるのかについて述べている。まず、送り手に求められるのは、自分の意図・目的を相手に正確に解釈してもらえるよう、コミュニケーションの行われる時・場所・状況に合わせて、言語面・非言語面において適切に自己を表現することであるという。ここで求められている姿勢は、本名(1997)が日本人に必要だとする「説明型コミュニケーション能力」とも一脈通じるものである⁹⁾。一方、受け手の立場にある場合には、送り手の意図したことに近い意味づけを行ない、適切に反応することが必要になるといふ。

このように、「コミュニケーション能力」という言葉によって求められてきたものとは、文化の異なる者どうしであっても、お互いの意図・目的

を正確に解釈し合えるよう、そのコミュニケーションの状況に合わせて、適切に表現し、適切に応答する、ということである。実際、石井(1990)は、この能力を次のように定義している。

コミュニケーション能力とは、コミュニケーションの場に参加する人たちの相互利益になるよう、一定の目的を旨として、言語記号および非言語記号を規則的に正しく、社会・文化場面的に適切に操作する能力のことである。(63頁)⁵⁾

3-2. 「異文化理解」とは

では、「異文化理解」とは、従来どのような状態にあることを言い表した概念なのだろうか。グディカンスト(1993)によると、「相互理解とは、相手があるメッセージに付与した意味を正確に推測すること」(47頁)を意味するという。また、シタラム(1986)は、「情報の内容=イメージ=意味について、送り手と受け手の間には共有性が欠けていることがある」(40頁)とした上で、「共有性の有無とは、事実上、コミュニケーションを行なおうとしている二人の人間のあいだに、理解があるかどうかということなのである」(同上)と述べている⁶⁾。

これらの見解を参照するなら、一般的に「理解」とは、当事者双方がそれぞれの心のなかに共通の意味を抱いている状態(受け手に伝わる意味が、送り手が意図したものと一致している状態)を指していることがわかる。したがって、日本人に求められる「異文化理解」とは、交し合うメッセージに対して、自分と「異質」な相手とが同様の意味を抱くことのできる状態を指している。つまり、それは、上述の「コミュニケーション能力」を身につけ、目的と場面における適切な表現(説明)と解釈(応答)ができるようになった状態を指すことになる。

4. 「適切性」と「規範」

ここまでは、コミュニケーション研究において、日本人の対人コミュニケーションの“現状”がどのように受け取られ、また、その“現状”への

「異文化理解」という捉え方についての検討

提言としての「異文化理解」「コミュニケーション能力の育成」が何を目指してきたのかということを見てきた。本節以降では、今日のコミュニケーション研究において上述のような方向性が打ち出されてきた背景について検討していきたい。より具体的に言えば、「異文化理解」「コミュニケーション能力」を上のような意味において提唱するときに、それらの研究のなかで、いわゆる「コミュニケーション現象」と呼ばれるもの⁷⁾が如何に認識されてきたのかということ(つまり、研究者のコミュニケーションに対する「認識のあり方」)について考察していく。

この検討に当たってキーワードとなるのは、「適切性」である。前節までに見てきたように、表現(説明)と解釈(応答)における適切さは、当事者間の意味の共有性を高め、コミュニケーションを成立させるための条件として考えられてきた⁸⁾。では、コミュニケーション行為に「適切性」と「意味の共有性」を求めるということは、どのような「認識のあり方」のもとに出てきたものなのだろうか。

第一に、適切であることを求めるということは、それを求める側は、当事者に何が適切な行為であるのかの判断が可能だと考えていることを意味する。そして注目したいことは、そのような判断が可能だと考えるときには、提唱者は、当事者一人ひとりの心のなかに適切か否かの判断を下す知識のようなものを想定しているということである。そのように想定された知識は、これまで「規範」と呼ばれてきた。実際、我妻(1987)は、「規範」を、ある社会集団、または文化において「どのような行動が、“承認された”“正しい”“善い”“当然の”または“正常な”行動であるかを定義」(171頁)づけるものとして考えている。つまり、個々人の心のなかに、文化ごとに異なる「人びとに了解され受け容れられている行動の規則」(同上)を見出しているのである。

適切か不適切かを定義づけるということから、規範はつねに、個々のコミュニケーション行為よりも先験的なものとして想定されている⁹⁾。言いかえれば、我妻(1987)も述べるように、「規範があるからお互いの行動がある程度予知可能になり、したがって社会生活が可能となる」(183頁)、という考え方がなされているのである。

このように、「規範」の存在が適切に振る舞うことを可能にする(コミュニケーションの成立を保証する)と捉えるときには、第二に、不適切な行為の原因は、規範に対する当事者たちの認識不足やコンセンサスのなさに求められることになる。そこから、自分と相手とが則っている規範は何か、自分(または相手)にとって則るべき規範は何かを知るべきだとの考えが出てくる。この点について、たとえば本名(1997)は次のように述べ、単に相手の規範を学習するだけでなく、自分の則る規範を相手に説明することの大切さも指摘している。

異文化間理解とコミュニケーションは、双方向の相互作用である。しかし、日本人はどちらかというと、これらのことを相手の行動パターンを学習することととらえてきた。その結果、自分の規範を相手に説明することが苦手である。(52頁)

「異質」な人びととのコミュニケーションにおいて、これまでは自分と相手の文化的背景の違いに注意を払うことが第一義とされてきた。その後には、自分と相手の規範の違いを学び、相互作用のなかで両者の則るべき規範についてのコンセンサスを高めるべきだとの信念があるからに他ならない。(コンセンサスを高める方法としては、相手の文化の規範に合わせる(シタラム)、自分の文化の規範もわかってもらう(本名)、二つを折衷する(ハウエル、久米)などのやり方が挙げられている。)すると、前節でその意味を確認した「異文化理解」(メッセージに対する同様の解釈のできる状態)とは、規範の異なる「異質」な人びとの間に、人為的・一時的な調整によって同一の規範をもたせることを目指していることがわかってくる¹⁰⁾。

5. 「異文化理解」という概念を可能にさせる「超越的見地」

以上から、「コミュニケーション能力」「異文化理解」を目指す分析が、ある特定の地点に立ってコミュニケーションというものを捉えていることが推察できる。

「異文化理解」という掛け声のもとに人為的に規範の調整を行おうとす

「異文化理解」という捉え方についての検討

るとき、そのように提唱する研究は、いわば「超越的な見地」または「第三者的な見地」に立っているといえるだろう。「超越的な見地」に立つとは、大澤(1994)も述べるように、「その存在が世界の有りかたに本質的な変容をもたらさないような仕方存在する」(273頁)あり方をいう(現象を事後的に振り返って再構成する場合もこれに含まれる)。この地点は、従来からのコミュニケーション研究の志向性——板場(1999)によると、近代思想のなかでコミュニケーションを「客観的」に観察・分析しようとする志向性が生まれたのだという——を体現したものと考えられる。

そのため、この見地にあっては、超越的な一点から、話し手と聞き手(の心のなかにある規範)を同時に、また均等に見渡し、観察・記述することが自明のこととされている。だからこそ、多くの研究では、第一に、自分の文化(メッセージの解釈の仕方を決定する規範もその一つ)と相手の文化の違いを「客観的」に知ることのできるものとして考えることになる。そして第二に、コミュニケーションの当事者たちは、「異質」な人びととのコミュニケーションを成立させるために、自分と相手の文化(規範)がどのように違うのかを「客観的」に知るべき存在として捉えられることにもなるのである。

6. 「認識のあり方」を探る意義とは

以上のように、コミュニケーションに対する「認識のあり方」は、コミュニケーションをどのような地点から捉えているか、コミュニケーション成立の条件をどこに見出しているかなどを検討することによって明らかとなってくる。では、これを明らかにする意義はどこにあるのだろうか。第一に、従来の研究は、「異質性」を認識できないという日本人の振る舞いを改善するために、かつてのあり方と理想像とを対比することに焦点を置いてきた。だが、研究の関心が、当事者の振る舞い方の検討というレベルに集中することによって、(そのような検討をする)研究者自身のもの見方に対する検討は見落とされ、なされないままにきている。

第二に、ここまで考察してきたことを踏まえると、「異文化理解」を提唱する際の「認識のあり方」は、その批判の対象でもあった相互補完的な

かかわりを分析する際にも、自明なものとして同様に前提とされていることがわかってくる。というのも、後者においても、(同一の)規範の存在がそのかかわりの成立の条件として考えられているからである(「相互補完」とは、もともと同様な規範に則る当事者間で適切な応答を自然に組み合わせることとして定義されている)。「認識のあり方」において、両者の前提が同じであるということに注意したい。

この点に注目するならば、従来行われてきたこと——(規範における自分と相手の)「同質性」を前提とするか、「異質性」を前提とするかという観点から当事者たちの振る舞いを区別・差異化すること¹⁾——も、もはや“普遍的なもの”としては受け入れられなくなる。なぜなら、「同質性」を前提とした振る舞いを批判し、「異質性」を前提とした振る舞いを奨励するということ自体、ある特定の(同一の)「認識のあり方」のもとに可能だからである。そして、本稿ではさらに、「対称—非対称」(柄谷)という概念を導入することによって、この特定の「認識のあり方」の抱える問題を表面化していきたい。

7. 「対称性」と「非対称性」

「超越的な見地」に立つコミュニケーション研究においては、当事者たちは、自分と相手の文化(とくに規範)の異同を「客観的」に知るべき存在として捉えられていた。だが、ある振る舞いが、(自分と相手の規範の)「同質性」を前提としたものか、「異質性」を前提としたものかということは、はたして当事者には判別可能なことなのだろうか。言いかえれば、規範の違いを知るという意味での「異質性」の認識を(認識できることは高く評価されてきたが)、当事者は積極的に行うことができるのだろうか。この点を問い直すために、ここでは「対称—非対称」という概念をとり入れて考えてみたい。

コミュニケーションの当事者たちは、これまで、自分と相手の文化(規範)の異同を「客観的」に知るべき存在として捉えられてきた。だが、それらを「客観的」に知るためには、既述のように、人は送り手と受け手の心のなかを同時に覗くことができなければならない。送り手、または受け

「異文化理解」という捉え方についての検討

手の立場にある人に、それは可能だろうか。答えは「否」である。なぜなら、送り手も受け手も、自分たちが今関わっているコミュニケーションの成立・不成立(または規範の一致・不一致)を、当事者でありながら、なおかつ超越者のように外部から確認することは不可能だからである。つまり、送り手と受け手はともに、お互いに相手が(心のなかで)どのような規範に則っているのか、または、そもそも規範を共有しているのかどうかということについて見通せる(確信をもてる)ような地点にはいないのである。

柄谷(1992、1993)は、コミュニケーションの当事者たちが、お互いに相手に対してこのような立場に立つ存在であるということ、あらためて確認している。そして、一方の言動を他方がどのような意味において解釈するのかは、その他方の恣意に拠らざるをえないとし、このことをもって、送り手と受け手の間に本源的な「関係の非対称性」を見出している。また、そのような「非対称的」な関係にある相手を「他者」と呼び、その「他者」にこそ「異質性」を見出している。

従来の研究では、当事者どうしの規範を一致させることに目標が置かれてきた。つまり、当事者にも、観察者と同じ「超越的な見地」に立つこと(相手と「対称的」な関係に立つこと)が求められていたといえる。しかしこれは、当事者と観察者とでは現象に関わる際に、立場に違いのあることが認識されないために起こったものである。そして、これまで重視されてきた「異質性」への認識とは、当事者たちを、「対称的」な関係に立つと理念的に想定した場合に可能なものであったといえる。そのため、送り手と受け手との間にあるはずの「非対称性」に関しても、従来の分析のなかでは言及されることがなかったのである。

8. むすび

「国際化」が叫ばれ、多くの日本人が「異文化コミュニケーション」を体験するようになった今日、「異文化理解」「コミュニケーション能力の育成」は急務のこととされている。本稿の目的は、こうしたすでに自明とされる概念を、単にその意味するところだけでなく、その背後にある分析の

前提にまで立ち返って、あらためて吟味し直すことにあった。そこで明らかになったことは、「異質性」への認識の有無という点から、日本人のかつての相互補完的な振る舞いと、「異文化理解」「コミュニケーション能力」とが一線画して捉えられていたということである。だが、いったん両者を分析する際の研究者の「認識のあり方」に目を向けるならば、二種類の振る舞いを区別し、後者を前者の解決策として提示することの意味が、以前よりも相対化されて現れることがわかった。

本稿では、おもに「超越的な見地」に立った分析の特徴について触れてきた。今後の課題は、この見地に立ってコミュニケーション現象を分析する際に伴う問題性を明らかにしていくことである。

註

- 1) これまで吟味が行われなかった理由として、一つには「理解」という概念に対する人びとの暗黙の信頼(「理解する」ということは人間にとって普遍的で正しい概念に違いない、という信頼)が関わっているものと思われる。
- 2) ここで、「現状」を“現状”と表記していることは、本稿の趣旨とも深く関連してくることである。日本人の対人コミュニケーションの現状として従来指摘された特徴は、コミュニケーション研究者の何らかの「認識のあり方」に基づいて見出されたものと考えられる。コミュニケーションに対する「認識のあり方」が異なれば、見えてくる日本人像も異なってくるはずである。そこで、今回取り上げた諸研究が特定の認識の地点に立つものであることを示すため、ここでは「現状」に“ ”をつけて強調している。
- 3) 遠山(1989, 1991, 1993)は、二者間の対人コミュニケーションを「情報代謝システム」として捉え、情報がいかに選択され淘汰されるか(どのような偏向性をもって処理されるか)という観点から、コミュニケーションのあり方をいくつかの基本型に分類している。このうち、二者(A, B)が二人のもたらす情報に対してどのように関わっていくことを志向しているかという面からコミュニケーションの型を分類しようとする、と、「片立型」「両立型」「同立型」「創造型」の四つに分けることができるという。「片立型」とは、A, Bが交流した場合に、二者択一的にどちらかのもつ情報に収斂することを理想とするもの(A+B → A or B)、「同立型」とは、情報A, Bが同じ情報を共有することで勢力を倍加する型(A+B → 2A=2B)、「創造型」とは、情報A, Bが異質性を残したまま、いずれとも異なる情報Cとなって終了する型(A+B → C)である。これに対して「両立型」とは、情報A, Bのいずれにも肯定的、妥協的

「異文化理解」という捉え方についての検討

に収斂するもの(A+B → A and B)をいい、日本人はこの型を多用するという。「アレもコレも」という考え方に象徴される「両立型」は、「片立型」(他との「異和性」を強調するために「アレかコレか」となる)と対比させて捉えられている。

- 4) 本名は、「説明型コミュニケーション能力」を、「民族文化の異なる人々との交流にあたって、相手の行動をその文化的背景で理解すると同時に、相手に対して自分の行為を合理的に説明する」(53頁)能力と定義している。この能力がとくに日本人に必要とされる理由は、日本人が伝統的に、暗黙の了解事項の存在を信じて、意味の解釈を相手の「察し」に委ねてしまい、話し手として工夫をこらしたり、入念な表現を考えるということを苦手としてきたことにあるという。本名は、共通の了解事項を期待できない外国人とのコミュニケーションでは、「異文化間の比較や対照を基礎に」、自分の(所属する文化の)行動パターン(規範)を明示的に説明しなければならないと述べている。
- 5) 石井は、「コミュニケーション能力」として既述のような対人姿勢——石井の言葉では、「精神的活動能力」「言語記号操作能力」「非言語記号操作能力」「場面条件判断能力」。いずれも「コミュニケーション能力」の主要構成要素として考えられている——他にも、日本人にとくに必要なものとして「方策的能力」を挙げている。
- 6) そのため、シタラムは、シャノン=ウィーバーやレイモンド・ロスのコミュニケーションの定義を、ある面では批判しつつ、別の面では評価している。まず、批判すべき点としては、それらが同一文化内のコミュニケーションのみを分析の対象としていること、つまり、その定義では「文化の違い」が誤解にどの程度関わっているのかをうまく説明することができないということを挙げている。一方、評価すべき点として、それらの定義が、送り手の意図した情報が受け手に伝えられるまでの正確さや、送り手が心のなかにもっているイメージを受け手の心のなかに再創造することに関心を示していることを挙げている。
- 7) リーチ(1981)は、「コミュニケーションを区切るいかなる単位であれ、そのコミュニケーション単位を『コミュニケーション現象』とよぶことにしたい」(28頁)と述べている。
- 8) この考え方を「治療」という名のもとに実践しているのが、精神療法である。精神分裂症の発症原因をコミュニケーションのとり方と関連づけて考察するベイトソンとロイシュ(1995)、およびベイトソン(2000)も、「適切性」をコミュニケーション成立のための条件として挙げている。それによると、分裂症者に共通する問題は、①相手のメッセージ(がどのような種類のメッセージなのか)を正確に受け取るためのシグナルを見分け、それを適切に解釈することができない、または自分の発するメッセージに適切なシグナルを表示することができない、②不正確に受け取った情報を修正することができない、③その

結果、まわりとの適切な相互作用ができなくなり、孤立する、ということにあるという。

- 9) 「規範」がどのように想定されたものであるのかについての説明は、大澤(1994)を参照のこと。
- 10) 大澤(1994)は、「理解」という「心的営み」を次のように定義している。「何かを理解するということは、規範(ルール)に従っているということである。してよいこと / してはいけないこと、そのように認知してよいこと / そのように認知してはいけないこと、この種の弁別を打ち立てることができないところに、理解という心的営みは有り得ない。」(286頁)
- 11) このように、両者の区別を自明視するということが、「異文化コミュニケーション研究」という学問を成立させる一つの要因になっているのではないかと考える。

参考文献

- 石井 敏(1990)「文化とコミュニケーションのかかわり」鍋倉健悦 編『異文化間コミュニケーションへの招待』(41-65頁)北樹出版。
- 板場良久(1999)「コミュニケーションが『演技』として見える理由——ゴッフマンのパフォーマンス論を中心として」『ヒューマン・コミュニケーション研究』27号、44-55頁。
- 岩田龍子(1982)「アメリカ人と日本人の人間関係」『現代のエスプリ 178 日本人の間柄』(38-52頁)至文堂。
- 大澤真幸(1994)『意味と他者性』勁草書房。
- 岡部朗一(1987)「個人と異文化コミュニケーション」古田暁 監修 石井敏 他『異文化コミュニケーション[改訂版]』(101-120頁)有斐閣。
- 小此木啓吾(1982)『日本人の阿闍世コンプレックス』中公文庫。
- 柄谷行人(1992)『探求 I』講談社学術文庫。
- 柄谷行人(1993)『言葉と悲劇』講談社学術文庫。
- グディカンスト、W. B. (ICC 研究会 訳)(1993)『異文化に橋を架ける 効果的なコミュニケーション』聖文社。
- シタラム、K. S. (御堂岡潔 訳)(1986)『異文化間コミュニケーション——欧米中心主義からの脱却』東京創元社。
- 手塚千鶴子(1994)『「甘え」から見た日本人のコミュニケーションと異文化接触』『異文化コミュニケーション研究』6号、21-44頁。
- 土居健郎(1971)『「甘え」の構造』弘文堂。
- 遠山 淳(1989)「日本文化と両立型コミュニケーション」『異文化コミュニケーション研究』1号、99-122頁。

「異文化理解」という捉え方についての検討

- 遠山 淳(1991)「日本文化の安定と変化」『国際文化論集』5号、143-159頁。
- 遠山 淳(1993)「日本文化とコミュニケーション」『日本人のコミュニケーション』(3-22頁) 桐原書店。
- 中根千枝(1967)『タテ社会の人間関係』講談社現代新書。
- 中根千枝(1972)『適応の条件』講談社現代新書。
- 中根千枝(1978)『タテ社会の力学』講談社現代新書。
- ハウエル、W. S.、久米昭元(1992)『感性のコミュニケーション——対人融和のダイナミズムを探る』大修館書店。
- 浜口恵俊(1982)『人間主義の社会 日本』東洋経済新報社。
- ベイトソン、G.、ロイシュ、J. (佐藤悦子、ボスバーク、R. 訳)(1995)『精神のコミュニケーション』新思索社。
- ベイトソン、G. (佐藤良明 訳)(2000)『精神の生態学』新思索社。
- ホフステード、G. (岩井紀子、岩井八郎 訳)(1995)『多文化世界——違いを学び共存への道を探る』有斐閣。
- 本名信行(1997)「言語教育と異文化間リテラシー」『異文化間教育』11号、52-65頁。
- 御堂岡潔(1991)「解説」高橋順一 他 編『異文化へのストラテジー』(3-8頁) 川島書店。
- 宮原 哲(2000)『コミュニケーション最前線』松柏社。
- リーチ、E. (青木保、宮坂敬造 訳)(1981)『文化とコミュニケーション——構造人類学入門』紀伊國屋書店。
- 我妻 洋(1987)『社会心理学入門(下)』講談社学術文庫。